

一八八四年十一月九日(日)

ドツキネーシヨル
南神村ドツキネーシヨルにおいて、聖ラーマクリシユナ、信者たちと共に

出家は蓄えず——タクール、アートマンの歡喜に酔う

タクール、聖ラーマクリシユナは南神村ドツキネーシヨルのカーリー寺におられる。ご自分の部屋の小寝台の上に東向きに坐つていらつしやる。信者たちは床に坐つている。今日はカルティク月黒分七日目、英国式にはキリスト暦一八八四年十一月九日。

時間は昼近く。校長が部屋に入つてみると、信者たちが次々とやつてくる。ヴィジャイ・クリシユナ・ゴースワミー氏といつしよに数人のブラフマ協会員が来ていた。司祭のラーム・チャクラバルティーもいる。すぐ、マヒマーチャラン、ナラヤン、キシヨリーが来た。少したつて又、数人の信者たちが来た。冬のはじめである。タクールは上着の用意のため、校長に持つてきてくれるようにとおつしやつておられた。彼は柔らかい布の上着のほかに厚地の上着も持つてきていた。タクールは厚地の上着を持つて来いとはおつしやらなかったのだが——。

聖ラーマクリシユナ(校長に向かつて)そっちの方は持つてお帰り——。お前が使つたらいい

よ——気にしないでさ。そうだ、お前にどんな上着を持ってきてくれと頼んだっけ？」

校長「はあ、あなた様はごく当たり前の上着を持ってくるようにとおっしゃいました。厚地の上着のことはおっしゃいませんでした」

聖ラーマクリシユナ「じゃあ、厚地の方を持ってお帰り。(ヴィジヤイたちに向かつて)なあ、ドワリカさんは肩掛けをくれた。それから、コッタ(インド北東部)の商人たちも一枚持ってきた。まあ、受け取らなかつたけど……」(タクールはつづけて何か言われるつもりだったらしいが、ヴィジヤイが口を出した)

ヴィジヤイ「はあ、当然でございますとも！ 必要なものは受けなければなりません。誰かがくれる筈でございます。人間を通じて与えられるのでございます」

聖ラーマクリシユナ「与えて下さるのは神様だよ！ 姑しゅうとめが言った、『あー、嫁や、誰でもが身のまわりの用事を足してくれる人を持つてるものだよ。お前さんにも誰か、足でもさすってくれる人があればいいのにね』すると嫁が答えた。『そんな！ 私の足はハリ(神)がさすって下さいますから、誰も要りません』この嫁は信仰の篤い人だから、こういうことを言ったのださ。

一人のファキール(イسلام教の托鉢僧)が、アクバル皇帝(註)のところへ何がしかの金を乞こいに行つた。

(訳註1) アクバル皇帝 (1542～1605) ——北インド全体を支配したムガル王朝第三代皇帝で、『アクバル』はアラビア語で『偉大』という意味。文字通りムガル王朝を帝国にふさわしい国家にした。宗教についてはとても自由な態度をとり、イسلام教、ヒンドゥー教、さらにはポルトガル人が広めたキリスト教まで関心を寄せていた。

そのとき皇帝は祈り(ナマーズ)をあげている最中だった——『おお、アッラーよ！私に金を与え給え、富を与え給え』と言って。それを見て僧は帰りかかった。だがアクバルは、待て、という合図をした。祈りが終わってから皇帝は僧にきいた。『お前、どうして帰ろうとしたのか』僧は答えた。『あなた様は、金をくれ、富をくれ』と祈っておられました。だから私は思ったのです。もしお願いするならば、こんな乞食のところをいたって仕様があるまい？私もアッラーにお願いしよう！』と』(訳註、ナマーズ——ベンガル語圏では、イスラム教の祈り、礼拝のことをベルシャ語のナマーズと言う)

ヴィジャイ「ガヤーで一人のサードゥウに会いましたが、この人は決して自分から何かしようとはしないのです。ある日、信者といっしょに食事したいという気が起りました。すると何処どこからか小麦粉だの、上等のバターだの、頭にのせた人がやってきました。果物や何かも運んできました」

〔貯蓄とサードゥウの三つの等級〕

聖ラーマクリシュナ「(ヴィジャイに)サードゥウには三つの等級があるんだよ。高、並、低、とね。高級のサードゥウは食べるために何の努力もしない。並なと低ひは、あの杖をもって歩いているダンディーやフォンディーのような人たちだ。並なのは、『南無ナモ・ナーラーヤナ！』と言って門戸かどに立つ。低ひになると、施しをくれない人と口げんかをする(一同笑う)。(訳註、ダンディー——杖を持ち歩くサードゥウをダンディー・サードゥウと言う。フォンディーに意味はなく、ダンディーに引っかけた言葉遊び)

高級に属するサードゥウは、バイソン(巨大な蛇の一種)みたいに極めつきの怠け者だ。坐つていればちや

んと食べてゆける。パイソンは自分のいるところから動かないよ。一人の若いサードゥが——子供のころ出家したサードゥだが、托鉢に行ったら一人の娘が出てきて食べ物くれた。娘の胸のあたりを見て、サードゥは胸に腫れ物ができているのではないかと思って聞いてみた。すると、家のなかから年配の女が出てきて教えてくれた。この娘が母親になったとき、赤ん坊に乳を飲ませることができるよう、神様が前もって乳房を授けて下さったのですよ、と。この話を聞いて、若いサードゥは驚いた。そしてこう言った——『じゃあ、私は托鉢する必要はないんです。神様は私のためにも食べ物を用意して下さいます』と」

信者のうちで何人かはこう思った——『では、自分たちも何も努力しなくてもいいというわけだろうか』

聖ラーマクリシユナ「努力が必要だと思っている人たちは、努力しなけりやだめだよ」

ヴィジャイ「バクタ・マラーのなかに、そのことについての良い話がございますね」

聖ラーマクリシユナ「お前、話しておくれよ」

ヴィジャイ「あなた様がお話し下さいまし——」

聖ラーマクリシユナ「いや、お前が話してくれ！ わたしはあんまりよく憶えていないから——」

（訳註2）バクタ・マラー——伝記作家ナーバージー（1573～1643）の作った説話で、多くの信者の話が載っている。バクタ・マラーは、『信者の花輪』の意味。

最初のころはそういう話を聞かなくてはいけない。だから、ずっとずっと前には全部きいたよ」

〔タクルルの境涯——ラーマひとつを思う——フルナ・ジュニヤーナ完全智と愛の特徴〕

「今はそうした心境ではないんだ。ハヌマーンが言ったね——『私は日や星の吉凶など何も知らない。ただ、ラーマのことだけを思っている』と。」

チャタク鳥は、天から降る水晶のような水だけを飲む。渴きで死になっても、くちばしを上に向けて空からくる水を飲もうと待っている。ガンジス河やヤムナー河や、七つの海にあふれるほどの水があるのに、その鳥は地上の水を飲もうとしない。

ラーマとラクシユマナがバンバー湖に行った。ラクシユマナは、一羽の鳥が何度も何度も水を飲みに下りてくるのだが、どうしても水を飲めないのを見た。ラーマに聞いてみると、あの御方はおっしゃった。——『弟よ、この鳥は最高の信者なんだよ。一日中、ラーマの名を称名しているんだよ！一方、のどが渴いたので水を飲みに来るのだが飲めない。飲むとその間だけでも、ラーマの名が途切れると思つて！』満月の夜、わたしはハラタリ(タクルルの年上の従兄)にこう聞いた——『兄さん、今日は新月かい？』と。(一同笑う)

ハツハツハツハ、そうさ！ 満月と新月の区別がつかなくなったら、フルナ・ジュニヤーナ完全智を得た証拠だと聞いていた。そんなこと、ハラタリが信じるわけではないだろ？ ハラタリは言つたよ——『ああ、末世だ！こんな人を皆が尊敬するなんて！ 満月と新月の区別もつかない人を——』

タクルルがこうおっしゃったでしょうどその時、マヒマーチャランが着いて部屋をの戸をあけた。

聖ラーマクリシユナ「(丁重に) お入り下さい、お入り下さい！ どうぞお坐り下さい！」

(ヴィジヤイたち信者に) あの境地のときは、何月の何日かまったく憶えていない。この間ベニー・パルの別荘でお祭りがあったが、日を忘れてしまった。何日は月の終わりでめでたい日だからハリ称名をしようとか、そういうことは皆、よく憶えていられないんだ。(少し考えた後) ——でも、誰それがここへ訪ねて来る、と言われたことは憶えているよ」(訳註——月の終わりの日に神の名を称えることは、とても吉兆なことでされている)

〔聖ラーマクリシユナの心魂はどこに——神の体得と靈性〕

「神に十六アナ(100%)心が行ってしまおうと、こんな有様になるんだよ。ラーマがハヌマーンに、『お前はシーターの様子を見てきたのだ。どんなふうだったか、わたしに言ってお聞かせなさい』と言われてハヌマーンは答えた。『ラーマよ、見ましたら、シーターの体だけが横になっていました。そのなかに心も魂もないのです。シーターは自分の心と魂を、あなたの蓮華の御足に捧げきっていらつしやるのです！ だから体だけが横になっていのです。それに、死王ヤマがその辺をうろついていました！でも、どうすることもできないでしょう？ 体だけなんですから——。心も魂もそこにはないのですから——。』

あるものに心を集中すれば、その性質をわがものにすることができる。一日中、神のことを考えて

いれば、神の性質を体得できる。塩の人形が海を測りに行って、それと一つになつてしまつた。

書物やお経の目的は何だ？ 神の体得だ。あるサードウの持つているメモ帳をめくつてみたら、どのページにもラーマの名が書いてあつた。そのほかは何も書いてない。

神への愛が目覚めたら、ほんのちよつとしたことが刺激になる。そうになると、たつた一度ラーマの名を称えても、百万遍の礼拝と同じ効き目が出る。

雲を見ると、孔雀は刺激されて楽しそうに尾を広げて踊り出す。聖女（シューリー・マター）もそんなふうだつた。雲を見ただけでクリシュナを思い出したものだよ！（訳註、雲——黒雲のこと。クリシュナを連想した）

チャイタニヤ様（デーヴ）がある村を通りなすつた。この村の土で長太鼓（コイル）が作られるということをお聞きになつた。たちまち法悦にうっとりなつてしまひなされた。だつて、ハリ称名のキールタンを歌うとき長太鼓（コイル）を鳴らすから——。

どんな人がこんな具合になると思う？ 俗心を捨てた人だ。世俗の汁が乾けば、ほんのちよつとしたことで靈性が刺激される。マツチ棒が湿つていれば、千回こすつても火はつかない。水分が乾けば、ちよつとこすつただけで火がつく」

〔得神の後は苦や死の時も心安らかに——すべてを神に捧げる〕

「肉体（からだ）には苦と楽がつきものだ。神をつかんだ人は、心も、命も、体も、魂も、すべてを神に捧げる。パンパー湖で沐浴した時、ラーマとラクシュマナは湖のそばの地面に弓を差しておきなすつた。沐浴

を終えて上がってきてラクシユマナが弓を引き抜くと、先の方に血が付いていた。ラーマはそれを見て、『弟よ、ほら見なさい。きつと何か生き物を傷つけたにちがいない』とおっしゃった。ラクシユマナが土をほじってみると、大きな牛ガエルが一匹いた。死にかけていた。ラーマが慈悲深い声で、『どうしてまた、鳴かなかったのだ。助けてあげたのに！ 蛇につかまったときは大きな声で鳴くの——』カエルは虫の息のなかからこう答えた——『ラーマ！ 蛇につかまったときは——』ラーマ、助けて！ ラーマ、助けて！』と叫んで鳴くのです。こんどは、私を殺そうとしているのがラーマだ』ということがわかったのです！ だから黙っていたのです』

自我の本性に住する方法——智慧のヨーガのむずかしさ

タクールは少しの間黙ったまま、マヒマーたちの方を見ておられる。タクールは、マヒマーチャランがグル（霊的指導者）というものを認めない、といううわさを聞いておられた。やがて又、話をはじめられた。

聖ラーマクリシュナ「グルの言葉を信じるのが大切だよ。グルの性質やひごろ日常の行動など、とやかく言う必要はない。たとえ居酒屋に通つても、私のグルはニティヤーナンダニティヤーナンダ（常に至福に満ちている御方）に決まってる。』

チャンデー（聖典『デーヴィー・マハートミヤ』とバーガヴァタの朗読をしていた人が、ある時こう言った。『ほうきが汚れていても、地面を掃除してきれいにする』と』

マヒマーチャランはヴェーダーンタ哲学を研究している。彼の目標は、ブラフマン智を得ることである。智識の道をたどってきている人物で、いつも推理考察に余念がない。

聖ラーマクリシュナ「(マヒマーに向かつて)——智者ジュニヤニの目的は自我の本性を知ることだ。それを智識といい、それを解脱と呼んでいる。至上のブラフマンこそが自分の本性なんだ。自分と至上パラブラフマンは一つだ。マヤーのためにそれができないんだよ。

ハリシユに言つてきかせたんだがね——何でもないさ。黄金の上にくらか土がかぶさっているだけなんだから、その土をのければいいんだ」と。

信仰者は私シを残しているが、智者は残さない。どんなふうにして自我の本性に安住するか、ナングタ(トーター・プリー)が教えてくれたよ——心フツイを知性のなかに溶かせ。知性フツイを真我アトマンのなかに溶かせ。そうすれば自我の本性に安住することができる」と。

でも、私シはどうしたって残るよ——無くならない。無限の水——上も下も、前も後も、右も左も水ばかり！ その水のなかに水のいっばい入った瓶かめがある。中も外も水。それでもやっぱり瓶かめがある。私シという相すがたの瓶かめが——」

〔以前の話し——カーリー寺院に雷が落ちたこと〕

「智者の肉体は以前通り、ある。しかし、智識の火で色情や怒りは焼き尽くされている。ずい分前のことだが、大嵐のときカーリー堂に雷が落ちた。わたしが行って見たら、扉や何かはどうにもなっ

てない。でも、ネジの頭が壊れていた。扉は肉体のようなもの、色情や怒りはネジだ。

智者は神の話ばかり好んでする。俗っぽい話になると彼は苦痛を感じる。所詮、俗人どもは別な人種なんだ。連中は頭に無明というターバンを巻いている。だから、同じような世間話を飽きもせずくり返す。

ヴェータダに七住地^{ブミ}のことが出ている。智者が第五住地^{ブミ}まで上がると、神に関する話しか耳に入らない話することもできない。そうになると、彼の口からはただ智識^{おしえ}の教訓しか出てこない」

これら一連の話を通じて、聖ラーマクリシュナはご自分の境地を説明しておられるのだろうか？ タクルは再び話された——「ヴェータダに、サッチダーナンダ・ブラフマンのことが書いてある。ブラフマンは一に非^{あら}ず、二に非^{あら}ず、一と二の中間なり。有^あとも言^いうべからず、無^なとも言^いうべからず、故に有^あと無^なの中間なり」

〔聖ラーマクリシュナと信仰のヨーガ——赤熱^{ラーガ}の信仰によって神をつかむ〕

「赤熱^{ラーガ}の信仰になれば——つまり、神を愛するようになれば、神にふれることができる。形式的信仰^{ヴァクティイ}は入りやすく離れやすい。称名^{ジヤパ}を何回、瞑想をこれだけして、これこれの供物を供えて護摩^{マントラ}を焚^たき、これこれの用具をつかって礼拝し、礼拝をする時にはこれこれの真言^{マントラ}を称^たえる。こんなのが形式的信仰^{ヴァクティイ}というんだよ。こんなのはするのも簡単だが、やめるのも簡単さ！ よく人が言うだろう——『君、ほかは幾日もハヴィシヤだけで過ごしてあれだけ礼拝したのに、何の効能もないんだ』なんてね。（訳

註、ハウイシヤ——特別の米を炊いたご飯に、決められた種類の茹でた野菜を添えた食事で、神聖な食べ物とされている。しかし、赤熱信仰は決して退転しないよ！ どういう人たちがラーガ・バクティを持つ？ 前生でたくさん善行(修行、奉仕など)をした人たちだ。さもなければ永遠完成者だ。荒れた空家を掃除しているうちに、パイプをとりつけてある泉が見つかる！ 土やレンガの粉がかぶさっていたのをすっかりりのけてやると、とたんに水がシューッと噴き上がった！ そんなものさ。

ラーガ信仰の人は、こんなことは決して言わない——『君、私は何日もハウイシヤだけで過ごしてきたが、何の効能もない！』かけだしの百姓は、作物がとれないとすぐ土地を見放してしまう。しかし先祖代々からの百姓は、作物がとれてもとれなくても百姓をつづけるよ。親父も爺さんも百姓してきたんだから、百姓さえしていれば食べていけることがよくわかっているんだ。

赤熱バクティの人たちこそ正真の信仰者だ。神さまが全責任を負って下さる。病院の名簿に登録されれば——病気が治らぬうちは、お医者さまが退院させてくれないよ。

神様がつかまえていて下さる人たちは、何の心配もない。田んぼの畦道を歩きながら、子供が父親の手をつかんでいる場合は田んぼに転げ落ちることもある——子供はうっかりして手を放すこともあるからね。でも、父親が子供の手をつかんでいれば決して落ちない」

〔ラーガ信仰になれば神の話ばかりする——世間を捨てることと家庭人〕

「信念で何か出来ないことがあるか？ 正しい宗教的信念を持った人たちは、人格神も、無相の實在

も、ラーマも、クリシユナも、宇宙ジャガット・マータの大実母も、みんな信じる。

郷里郷里に帰る途中、大嵐に出遭った。野原の真ん中で、おまけに強盗が出るといううわさのあるところさ。わたしはあらゆる神の名を称とえたよ——ラーマ、クリシユナ、マー、それからハヌマーン！ほんとに知ってるだけの名前を称とえた——どういうことかわかるかい？

下男か女中が銅貨を持ってバザールに買物に行くとき、こう言いながら数える。これはイモ代の銅貨、これはなすび代の銅貨、あとはみんな魚の分——。使い道が違うんだよ。それぞれ分けて勘定したあとは、みんないっしょにして持つていく。

神を愛するようになると、神の話ばかりしたが。誰かが好きになると、その人の話を聞いたりしゃべったりしたくなる。

世間の人は、自分の息子の話をしながらヨダレを流す。誰かが息子を褒ほめたりすると、早速こう言う——『さあ、ほら、おじさんの足を洗う水を持つて来な！』

鳩の好きな人たちの前で鳩のことを褒めると、とても機嫌がいい。もし、誰かが鳩の悪口でも言うものなら、声を荒げてこう言うだろうよ。『お前さんの四代前からの血筋の中で、誰か鳩を飼った人間がいるのかい？』

タクルルはマヒマーチャランに向かって話しかけられた。マヒマーは家庭を持っている。

聖ラーマクリシユナ（マヒマーに向かって）家庭や世間のことをぜんぶ捨ててしまう必要があるかい？ 執着をなくせばそれでいいんだ。だが、修行はしなけりゃいけない。五官の誘いと戦わなけ

りやいけない。

岩いわの中から戦うのはとても有利だ。岩いわのなかではいろんな助けが得られるからね。この世は経験の場だ。一つ、一つ経験して、それを捨てていくことだ。いつかわたしは、金のクサリを腰に着けたいという希望をもったことがある。結局、望みが叶って金のクサリを腰にしめたよ。でも、すぐ外はずさなけりやならなかった。(訳註——生理的苦痛を感じたから)

玉ネギを食べて、よく心に言いきかせた——「心よ、これが玉ネギというものだ」と。そして、口の中で玉ネギをあちこちに動かして、さいごに吐き出した」(訳註——玉ネギは靈的生活には有害な食物とされている)

楽しいキールタン

今日は、或る歌手がグループを率いて来て、キールタンを歌うことになっている。

タクール、聖ラーマクリシュナは信者たちに時々お聞きになる——「キールタンはまだかい？　まだかい？」

マヒマー「キールタンが来なくたってこんな楽しいじゃないですか！」

聖ラーマクリシュナ「いいや、そうじゃないよ。こんなこと(皆との語らい)は毎日あるけど……(キールタンはそう毎日あるわけじゃないよ)」

部屋の外にいた信者が、「キールタンの人たちが来ました」と報告した。

聖ラーマクリシユナは大喜びで、「アーン、来たかい」とおっしゃった。

「部屋の南東の長ベランダに敷物が広げられた。聖ラーマクリシユナはおっしゃる——」ガンガールの水を少しふりまけ！ 俗人どもが大勢踏んだんだから——」

バリ村の住民、ピヤリ氏の家族が婦人連れでカーリー寺に参詣に来ていて、キールタンが催されることを聞いて、是非、聞かせていただきたいと申し入れてきた。一人がタクールのところに来て、「ピヤリ家の人たちが坐らせていただく場所がありませんか、とうかがっております」と言った。タクールはキールタンを聞きながらおっしゃる——「だめ、だめ、場所がないだろ？」

ちょうどその時、ナラン(ナラヤン)が来てタクールツラチムに礼をした。

タクールは「お前、なぜ来たんだい？ ぶたれるのに——お前の家の人に」

ナランが部屋の方に行くのを見て、タクールはバブラームに目くばせと手真似で、「何か食べさせてやれ」と合図をなされた。

ナランは部屋に入った。突然、タクールは立ち上がって部屋にお入りになった。ナランにご自分の手から食べさせておやりになるつもりなのだ。食べさせた後で、又、キールタンの場所に戻って坐られた。

信者たちとキールタンの楽しみ

大勢の信者たちが来ていた。ヴィジャイ・ゴースワミー、マヒマーチャラン、ナラン、校長、若いゴパールなど……。ラカールとバララームはプリンダーヴァンに行っている。

時間は三時か四時ごろ。タクール、聖ラーマクリシュナはベランダでキールタンを聞いていらつしやる。ナランがすぐ横に坐つた。ほかの信者たちは囲りを取り巻くようにして坐っている。

その時アダルが到着した。アダルを見て、タクールは興奮して気もそぞろになつておられる。アダルが礼をして席に着こうとすると、タクールはもつと近くに坐るようにと手招きをなさつた。

キールタンは終わった。皆、そこから散つていった。信者たちは、庭の中をあちこち散歩している。大実母カーリーとラーダーカーンタのお堂の献灯を拝観に行つた人もいる。

日がつつぱり暮れてから、タクールの部屋に再び信者たちが集まつてきた。

タクールの部屋のなかでは、またキールタンの準備がはじまつている。タクールは熱心に、「ここにもう一つ灯火をつけておくれ」とおっしゃる。灯火が二つつくと部屋は大そう明るくなつた。

タクールはヴィジャイにおっしゃる——「お前、どうしてそんな遠くに坐っているんだ？ こつちの方においでよ」

こんどのキールタンはすばらしい雰囲気になつた。タクールは酔つたように踊り出される。信者たちは、この方の周りを廻りながら踊っている。ヴィジャイは踊りながら、衣服がだんだん落ちて裸になつてしまつた。殆んど意識がないのである。

キールタンが終わると、ヴィジャイは鍵を探し始めた。どこかへ落としたのである。タクールは、「ハリの名をとえろ！」と言つてお笑いになつた。つづけて、ヴィジャイにこうおっしゃつた——「今さら、そんなもの何だ！」(訳註——即ち、まだカギなどにかかつているのか？との意)

キシヨリーがお別れのあいさつをした。タクールはやさしく彼の胸に手をふれて、「じゃ、またおいで」とおっしゃった。その口調は愛情に満ちていた。間もなくモニとゴパールがそばに行つてあいさつをした——彼らも帰るのである。タクールはまた、やさしい言葉をおかけになる。言葉から蜜が滴したるようだ。「あしたの朝帰ればいいのに——。夜は寒いから、またカゼを引かないかい？」（訳註、モニ——マヘンドラ・グプタが使った仮名の一つ）

〔信者たちと共に〕

というわけで、モニとゴパールはその夜帰らなかつた。泊まつていくことにした。彼等のほかに、一、二名の信者が床に坐っている。やがてタクールは、ラーム・チャクラバルティー氏におっしゃった。

「ラーム、ここにも一つドア・マットがあつたんだよ。あれ、何処にいった？」

タクールは今日一日中、休む暇がなかつた——少し横になる暇さえなかつたのだ。信者たちにとり巻かれて身動きもできなかつた！ 今になってやっと、外に出られた。部屋に戻つてお入りになると、モニがラームラルのそばに坐つて歌を書きとつているのをごらんになつた——。

ターラ、ターリニ
救いの女神よ！

死神ヤマに怖れおののく我に

いざ、すみやかに救いの手を……

タクールは、「何を書いているの?」とお尋ねになった。歌を書きとつていけると言うと、「これとても長い歌なんだよ」とおっしゃった。

夜、タクールは、シユジのパヤスとルチを二枚お食べになる。タクールはラームラルに「シユジはあるかい?」と言っておられる。(訳註、シユジ——ふるいに残る小麦の粗粉。パヤス——穀物に牛乳と砂糖を入れて粥かゆにしたもの)

歌を一、二行書いたモニは、それ以上書けなくなつた。

タクールは床の座布に坐つて、シユジの粥かゆを食べていらつしやる。

夜食をとられた後、タクールはまた小寝台の上にお坐りになつた。モニは寝台のわきにおいてあるマツトの上に乗つて、タクールと話をしている。タクールはナラヤンのことを話すうちに、興奮おきを抑えきれぬ様子になられた。

聖ラーマクリシユナ「今日はナラヤンに会つた」

校長「そうでございましたね。目が潤うるんでいました。あの顔を見ると、こちらが泣きたくなりました」
聖ラーマクリシユナ「あの子を見ると、母親みたいな気持ちになる。ここへ来ると家でぶたれるのに——。誰も守つてやる人がいないんだよ。(歌の節回しで)ああ、せむし女が悪口を言いふらす。なのに、ラーダーをかばつてくれる人は誰もいない!」

校長「ははははは、ハリバダの家に本を置いて、ここへ逃げてきたのでございます」

聖ラーマクリシユナ「それは良くないねえ」

タクールは黙ってしまわれた。しばらくすると又、話し出された。

聖ラーマクリシユナ「ねえ、あの子はすばらしいものをもっているんだよ。そうでなかったら、わたしはキールタンを聞いている最中に、あんなに惹きつけられる筈がないもの！（彼に会いたくて）わたしは部屋の中に入ってしまったものね——キールタンをそっちのけにして。あんなことは今までになかったよ」

タクールは沈黙された。しばらくすると又、話された。

聖ラーマクリシユナ「あの子に前三味パトツのとき訊いてみたら、たった一言こう言ったよ——『私はしあわせです』と。お前、あの子に時々何か買って食べさせておやり——母親みたいな気持ちになつて」
タクール、聖ラーマクリシユナはテージチャンドラの話をなさる——

聖ラーマクリシユナ（校長に）「いちど、彼に聞いてみておくれよ。わたしのことをどう思っているか——智者ジュニヤールだと思つているのか、それとも何だと思つているのかな？ テージチャンドラはとても無口なそうだが——。（ゴパールに向かつて）テージチャンドラに、木曜と火曜に来るように言つてくれ」

床の座布の上に、タクールは又、お坐りになる。シユジを食べていらつしやる。横の台の上にはランプが明るく灯っている。タクールのそばに校長は坐っている。タクールは、「何か甘いものがあるかい？」とお聞きになった。校長は出来たてのサンデシユ（ミルク菓子）を持参してきたのだ。ラー

ムラルにきくと、サンデシユは棚の上にあると言う。

聖ラーマクリシユナ「どれ、持ってきておくれ」

校長は慌てて棚を探しに行った。見るとサンデシユはない。きつと信者たちに出してしまったのだ。困り切つてタクルのところに戻り坐つた。タクルは話をしておられた。

聖ラーマクリシユナ「そうだ、いちどお前の学校に行つてみようかな」

この方は、学校でナラヤンに会いたいと思つておられるのだ、と校長は推察した。そして、こう言つた。「私^{すまい}じもの住居^{すまい}に来て待つておられるとよろしゅうございます」

聖ラーマクリシユナ「いや、考えがあるんだよ。ほかに見込みのある子がいるかどうか、一度見てみたいんだよ」

校長「ではどうぞ、お越し下さいませ。参観に来る人もおりますから——。あなた様もその人たちのようなつもりでおいでになればよろしゅうございましょう」

タクルはお粥^{かゆ}を食べ終わると小寢台に行つてお坐りになった。信者の一人がタバコの用意をして差し上げた。タクルはタバコをお吸いになった。その間、校長とゴパールはベランダに坐つてルテイ(チャバテイ)や豆などの軽食をとつた。彼らは音楽塔^{ナハバト}で寝ることにきめた。(訳註——小麦粉を練^{かま}つて窯^{かま}で焼いたのがルテイ(ロテイ)で、油で揚げたのがルチ。油で揚げ分、ルチの方が上等とされる)

食べた後、校長は寝台のわきにあるマットのところへ行つて坐つた。

聖ラーマクリシユナ(校長に)「音楽塔^{ナハバト}には、瓶^{かめ}だの鍋^{なべ}だのいろんなものが置いてあるだろう？」

ここで寝たら？ この部屋でさ」

校長「では、お言葉に甘えさせていただきます」

弟子と共に

夜の十時か十一時ころになった。タクールは小寝台で枕によりかかって休んでおられる。モニは床に坐っている。タクールとモニは話をしておられる。部屋の壁ぎわにある台の上に、ランプが明るくかがやいている。

タクールは無辺際の大慈悲海である。モニの奉仕を受けるおつもりらしい。(訳註——聖者の身边に奉仕することは大へんな功德となる)

聖ラーマクリシュナ「ねえ、足が痛いんだよ。ちょっと手でさすっておくれ」

モニは小寝台の上に坐り、タクールの両足を自分のひざにのせて静かにいてねいにさす。タクールは時々、何かおっしゃる。

聖ラーマクリシュナ「ニコニコしながら」今日の話はどうだったい？」

モニ「はい、大へん良いお話でございました」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、アクバル皇帝のどんな話をしたっけね？」

モニ「はあ——」

聖ラーマクリシュナ「話してみられるかい？」

モニ「ファキール(イスラム神秘主義の修行者)が金を喜捨してもらうため、アクバル皇帝に会いに来ました。その時、アクバル皇帝は神に祈りの言葉を捧げておりました。祈りのなかで、金と財宝を与え給え」と懇願しているのを聞いた僧は、やおら部屋から出て行こうとしました。それを引き止めた皇帝は、祈りの後で僧にそのわけを聞くと、僧は「もの乞いをするなら、乞食に乞う法はないでしょう!」と答えました」

聖ラーマクリシュナ「そのほかに、どんな話をしたっけ?」

モニ「貯える、ということについていろいろと——」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ、何て言った?」

モニ「努力するべきだ、と感じている間は努力しなければならない、と。貯蓄については、シンティで実にはすばらしいお話をなさいました!」(訳註——一八八四年十月十九日参照)

聖ラーマクリシュナ「どんな話?」

モニ「あの御方にすべて任せきってしまえば、あの御方はその人の全責任をおとりになる。未成年者の後見人のように——。それから、こういうお話も聞きました。招待された家で、小さい子は自分の席がわからないから、誰かが食卓の前に坐らせてくれる、と」(訳註——一八八四年九月二十九日参照)

聖ラーマクリシュナ「いや、それじゃ十分とは言えない。父親が子供の手をつかんで連れていけば、その子はもう転ばないんだ」

モニ「それから今日、あなた様は三種類のサードゥウの話をなさいました。高いサードゥウは坐ってい

るだけで食べていける、と。それから、あなた様は若いサードゥの話をなさいました。娘の胸を見て、胸に腫れ物ができているのかと聞いた話。それから、とてもとても良いお話をなさいましたよ。みんな、むかしむかしの話——」

聖ラーマクリシユナ「ハハ、どんな話だったかな？」

モニ「あの、パンパー湖のカラスの話。ラーマの名を一日中となえているので、水のそばに行っても飲めないのです。それから、あのサードゥの書付けの話——それにはただ、シーム、ラーマ」という字だけがどのページにも書いてありました。それからハヌマーンがラーマに言ったこと——」

聖ラーマクリシユナ「何て言いなすった？」

モニ「シーターのの様子を見ましたところ、ただ体だけが横になっていて、心も魂もあなたの御足に捧げておられました！」

それからチャタク鳥の話——天から降る清澄きよい水だけ飲んで、ほかの水は決して飲まない話。

それから智慧のヨーガと信仰のヨーガのお話」

聖ラーマクリシユナ「何て？」

モニ「かめ瓶びんを意識している間は、私の瓶びんはどうしても無くならない。私わたしを意識している間は、私わたしは信者、あなたは神かみ」

聖ラーマクリシユナ「いや、ちがうよ。瓶かめは意識していてもいなくても、瓶びんはなくなるらない。

私わたしはなくなるらない。何千回思い直してみたってなくなるらない」

モニは数分間沈黙していたが、再び話し出した。

モニ「カーリー堂でイシャン・ムクジェーとお話をなさいましたが、あのとき私もあそこに居合わせて、お二人の話を聞いたことはまったく幸運でございました」(訳註——一八八四年十月十一日参照)
 聖ラーマクリシユナ「ハッハッハ、そうかい。どんな話だったか言ってみてごらん？」

モニ「仕事をするグループはほんの初歩のグループだ、というお話でした。シャンブー・マリックに、『もし、神がお前の目の前においでになったら、病院や施療院を沢山こしらえて下さい』とお願いするつもりか?』とおっしゃった話。

それから、もう一つあります。——『仕事に執着している間は、神は会って下さらぬ』と。ケーシャブ・センにそうおっしゃいました」(訳註——一八八四年十月十一日参照)

聖ラーマクリシユナ「何て?」

モニ「子供がおしゃぶりに夢中になっている間は、母親は料理などしている。おしゃぶりを放り出して泣き出すと、母親は火にかけてある鍋まで下ろして子供のそばに来る、と。

それからあの日、もう一つお話になりました。ラクシユマナがラーマに、『^{かみ}至聖は何処で見ることが出来るのですか?』と聞くと、ラーマはいろいろな説明なすつた最後にこう言われました。『^{ウルジタ・バクア}弟よ、法悦の信仰あるところ——笑い、泣き、踊り、歌って——愛に酔いしれているところ——そこにこそわたし(至聖)はいるのだ』と」

聖ラーマクリシユナ「アハ、アハ」

タクールはしばらく黙っておられた。

モニ「ある日、イシヤンにニヴリッテイのお話ばかりなさいました。あの日から、私どもの多くは本心にかえりました。一生懸命、義務や仕事を減らそうとしております。ッラーヴァナがランカーで死んだら、ベフラが泣いて悲しんだ^(訳註1)！とおっしゃいましたね」(訳註——一八八四年十月十一日参照)

タクール、聖ラーマクリシュナは、この言葉をきいて大声をあげてお笑いになった。

モニ「(非常に^{うやうや}恭しい態度で) あのを、義務や仕事——つまり、いろんな関わり合いを減らすのはいいことでございますね？」

聖ラーマクリシュナ「うん。でも目の前で誰かが頼んだりしたら、又話は別だよ。サードウや気の毒な人に出会ったら、世話をしなければいけないよ」

(訳註3) ニヴリッテイ——田中嬭玉氏は、内観心、無執着心、離欲と訳されていますが、外(世間の仕事、行事)に関心のある心を、内(神)に向きを変え、欲を捨てて実在するのは神のみであると知ろうとする心のあり方を指すと思われる。以下、スワミ・ブラフマーナンダ(ラカール)の言葉を参考として記す。「心は外界の形成要素でもある三つのグナによって創られている。だから心は世間のことを考えるのが好きなのだ。これが心の性質であり素質である。人がわが心を外界から内部に引っ込めて神の聖なる御足に集中せしめることができるのは、ひとえに神の恩寵によることである。」(日本ヴェーダーンタ協会刊「永遠の伴侶」より)

(訳註4) ベフラはラーヴァナとは全く関係なく、生きていた時代も全く違っていた。これは、如何に人間が全然関係のないことに流されてしまうかを示したインドの諺である。

1884年11月9日(日)

モニ「それからあの日(一八八四年十月十一日)、イシヤンにおべっか使用について実に適切なことをおっしゃいました。死骸にむらがるハゲタカのようなものだ——。その話はいつか、学者のパドマローチャンにもおっしゃいました」

聖ラーマクリシュナ「いや、ウロのヴァマンダースにだよ」

やがて、モニは小寝台から下りて、寝台わきのマットに坐った。

タクールは眠くなられてモニにおっしゃる。「お前も寝ろ。ゴパールは何処へ行った？ お前、戸を閉めてくれよ」